

[特別企画1]

高校献血の推進と質の改善 ～400mL献血率の向上と採血量不足の低減を目指して～

手塚美紀¹⁾, 福庭 卓^{1), 2)}, 萩原多加子¹⁾, 才間俊郎¹⁾, 中村 弘¹⁾, 杉田完爾¹⁾
山梨県赤十字血液センター¹⁾, 現: 東京都赤十字血液センター²⁾

【はじめに】

山梨県血液センターは、高校献血を若年層献血者の推進に非常に重要な団体と捉えており、県内の全日制高校40校中39校で献血を実施している。しかし、平成26年度の高校献血における400mL献血率は61.0%（高校献血を除くと90.0%）と低率で、採血量不足による減損率は2.53%（高校献血を除くと0.67%）と高率であった。山梨県における高校献血の質の向上を目指して、平成27年度に献血推進課・採血課の合同会議を設置し、さまざまな改善策を実行してきたが、成果が得られたので報告する。

【取り組み】

1. 対象生徒と時期の見直し

対象生徒を原則2年生男子と3年生に限定し、400mL献血が可能な生徒が増えるよう実施時期を年度の下半期に設定した。

2. 渋外活動の改善

学校長に事前面談を行い、400mL献血の重要性を説明し、担任教員や生徒への400mL献血の推進を行いやすくした。水分補給、食事、睡眠の重要性を強調したポスターとパンフレットを新規に作成した。

3. 献血環境の整備

1) 受付場所を屋内に変更

採血バスとの寒暖差を減らすため、受付場所を可能な限り屋内に変更した。

2) トランシーバーの導入

トランシーバーでバスの混雑状況を確認しながら生徒を誘導することで、屋外の待機時間を短縮した。

3) 水分摂取の徹底と飲料の内容変更

受付時に水分摂取の必要性を説明し、水分摂取を促した。採血前検査で水分摂取量や口渴の有無を確認し、本採血中にも水分摂取を促した。配布飲料をお茶からスポーツ飲料に変更した。

4) 食事後採血の徹底

昼休み直前の生徒には採血前検査まで実施し、昼食後に本採血を実施した。

5) 保温の徹底

寒い時期には全生徒に使い捨てカイロを受付で配布した。採血前検査では、適宜アームウォーマー、使い捨てカイロを使用した。

4. 400mL献血の直前依頼

400mL献血の条件を満たしている生徒には、受付時とデータ入力時に400mL献血の必要性を再度説明し、400mL献血への変更を依頼した。

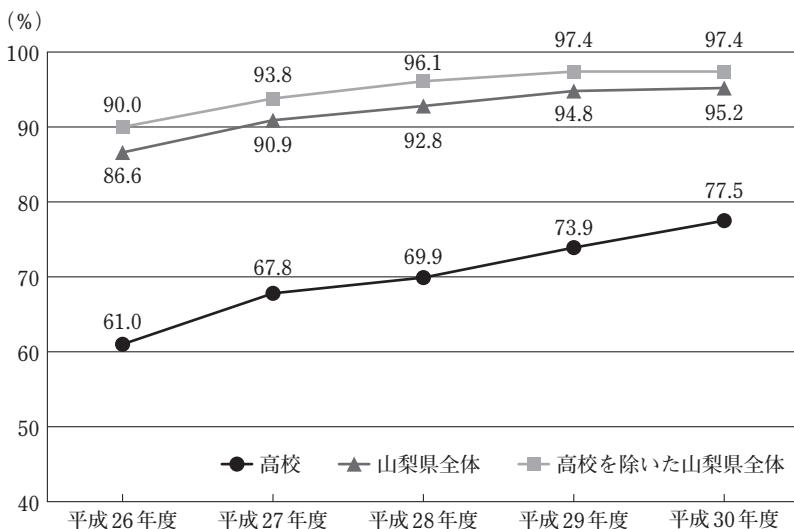
5. 採血時の工夫

採血中のレッグクロス運動の実施、頻回の声掛けの実施、本採血前のチョコレート提供による生徒の緊張緩和などを行った。

【結 果】

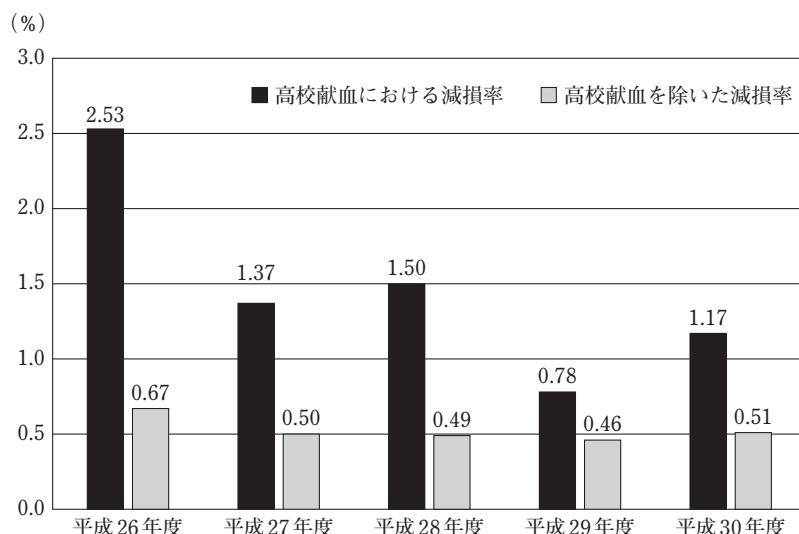
1. 高校献血における400mL献血率の年次変化 (図1)

400mL献血率は、平成27年度67.8%，平成28年度69.9%，平成29年度73.9%，平成30年度



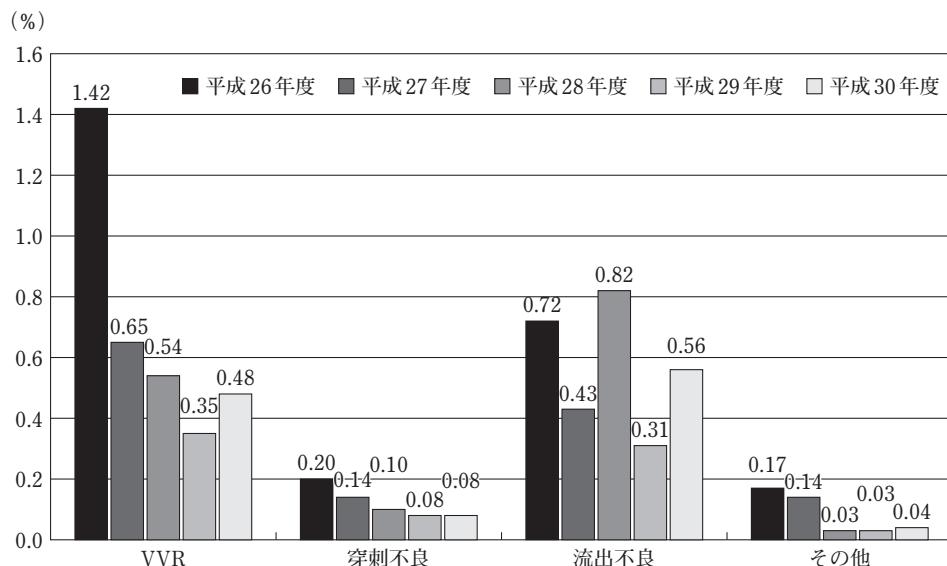
●は高校献血の400mL献血率、▲は山梨県全体の400mL献血率、■は高校献血を除いた山梨県全体の400mL献血率の年次変化(平成26年度から平成30年度)を示している。高校献血の400mL献血率向上に伴い、山梨県全体の400mL献血率も向上している。

図1 高校献血における400mL献血率の年次変化



高校献血における減損率は、取り組みを始めた平成27年度から1%程度に低下させることができた。しかし、高校献血を除いた減損率よりはいまだ高率であった。

図2 高校献血における採血量不足による減損率の年次変化



平成26年度と比較すると、すべての項目で低下した。VVRを原因とする減損が最も顕著に低下した。

図3 高校献血における減損原因別の年次変化

77.5 %と経年的に向上した。高校献血の400mL献血率が向上したため、県全体の400mL献血率も経年的に向上し、平成30年度は95.2 %まで向上した。

2. 高校献血における採血量不足による減損率の年次変化と減損原因別の年次変化（図2, 3）

採血量不足による減損率は、平成27年度1.37%，平成28年度1.50%，平成29年度0.78%に低下した。しかし、平成30年度は1.17 %とやや増加し、VVRと流出不良の軽度増加が原因と判明したた

め新たな対策を実施中である。減損の原因別の検討では平成26年度と比較し、すべての項目で低下したが、VVRの減少が最も顕著であった。

【結語】

山梨県内のほぼすべての全日制高校において献血を実施し、400mL献血率を77.5 %に向上させることができた。同時に減損率を1 %程度まで低下させることができた。今後も2課で連携をはかり、高校献血の質をさらに向上させていく予定である。